ゆりねがセクハラ教授に
一服盛られて陵辱される話。

「ふう・・・」
これで今日の講義は終わりね・・・
バイトもないし本屋にでも寄って帰ろうかしら。
でも最後の講義が日本文学なのは嫌な気分になるわ・・・
あのセクハラ教授の顔見て帰らなきゃならないんだから。

「あ、ゆりねくんちょっといいかな」
「・・はい？」
講義終わった後に話しかけてこないで欲しいんだけど・・・
・・大体なんで名前呼びなのよ。
「この後私の研究室に来てくれるかな、先日のレポートのことで
ちょっと聞きたいことがあってね」
「はあ・・・」
最悪・・・・・・バイトの方がよっぽど楽ね。
「では後で」
・・大体なんで一回クビになったのに戻ってこれたのよこいつ。

「今お茶をいれよう」
「お構いなく、それよりレポートの話を・・・」
「まあまあ、いい茶葉が手に入ったんだよ」
「はあ・・・」
どうでもいいわ・・・
こっちは早く済ませたいっていうのに・・・

「・・・・・・・・・・・・・・」
「よしよし、しっかり寝とるな・・・
さすが無味無臭の超強力眠り薬、高かった
だけあって効き目抜群だ」
「しかし可愛い寝顔だ、今から好きにできると
思うと・・・・・ぐふふ」

「ん…」
（あれ、私何して…）

（ん…体、動かな…）

「っ・・・・!」
「お目覚めかな、ゆりねくん」
「何、これ・・・?」
腕、縛られて・・・それに力も入らない・・・
「ふふ・・・ここは私の研究室のベッドだよ。
仮眠用ということで置いてるが、本当の目的は
こうして気に入った生徒を連れ込むためのね」
「なっ・・・」

「アンタ、こんなことしてどうなるか・・・」
「おー怖い目で睨むなあ・・・
でも縛られてる上、ほとんど力も入らないだろう？
お茶に仕込んだ薬、体を麻痺させる作用もあるからね」
「くっ・・・」
今までは肩に手を置いたり、卑猥な言葉をかけてきたり
程度だったのに・・・まさかこんな手段に出るなんて・・・
「いやー、一回クビになりかけた時は焦ったよ・・・
一番のお気に入りのゆりねくんにまだ手を出してないのにって」
「・・・本当に気持ち悪いわね」
「で、あちこちに根回しして何とか戻ってこれたから
善は急げということでね・・・」
「・・・・・・・・・」
何が善は急げよ・・・善どころか邪悪じゃない。

『さてさて・・・』
『あっ・・・ちょ、ちょっと・・・！』
『ほー・・・ドレスの下はドロワーズか、
中々本格的だねー』
『く、ぅ・・・』
やっぱりこういう目的か・・・
まずいわ、抵抗する方法が何も・・・
「それじゃあドロワーズの下は・・・」
「やめっ・・・」

「？……」
「ほほぉ、こりゃー…
いぶかゆのねくんの生パンツか」
「いくないと…出るといに出れば今度こそ
クビというか豚箱よ、わかってるの？」
「当然、脅迫材料としてこの部屋は撮影してるよ。
ゆりねくんも、自分の恥ずかしい姿が不特定
晒されるのは嫌だろう？」
「いの、クズ…」
「ふふふ…何とでも言っていいよ。
気に入ったJDを手込めにするために、
教授なんて面倒な仕事やってるんだ」

「ーーーー？ー」
「おぼ、こら感触が…
若ら助せてくくださらんな」
「ぉ、反抗を動らのよう…！
触るな、りの？…」
ん、体が動かない…
りんな下衆に触られるなんて…
「しかし細い足だなーゆりねくん…
これは先生としても心配だし、他のとりつぅ
チェックしてあげないとな」
「いらないわよう…！
やめ、脱がせないでっ…」

「あ・・・」
「ぐふふ・・・いい格好だねえ・・・
教え子の下着姿というのはたまらんな」
「・・・・・・・・・・・」
「そしてその下着を剥いていくのはもっと
たまらんのだよ」
「変態っ・・・」
「じゃあまず、その可愛いお胸を
見せてもらおうかな」
「うっ・・・」

「……」
「ほー…慎ましいおっぱいだねえ」
「う、うるさい…」
「平均的な女子大生よりかなり小さいな…
ちゃんと栄養取ってるか、ゆりねくん？」
「っ…！」
邪神ちゃんに言われたときもイラっとしたけど
こいつに言われると余計に不快だわ。
「しかし乳首は綺麗な色してるねえ…
まあそれに、私は貧乳もいける口だしね」
「誰も聞いてないわよ…」
喋れば喋るほど気持ち悪いわこいつ…

「あっ・・・!? やっ、ちょっとやめ・・・!!」
「ふう・・・この僅かな柔肉、貧乳の醍醐味だな」
「や、あ・・・っ・・・
触るな、気持ち悪いっ・・・!」
指が這い回って・・・
悍ましさで鳥肌が立つわ・・・
「どうだ、普段彼氏にはこういう風に
揉まれたりしてないのか?」
「そんなの・・・いないわよっ・・・!
いいからもうやめて・・・」
「お、もしかしてゆりねくん未経験か?」
「・・・・・・・・・・・・」
「ぐふふ、いいねーますます興奮してきたよ・・・
それじゃあ下の方も」

「さあ、ご開帳と・・・」
「やっ、やめなさい・・・・！
いい加減に・・・」
「おー、これまた綺麗なもんだ・・・
ひひ、本当に初めてっぽいな」
「く、うううぅ・・・・・・」
顔が熱くなる・・・
こんなクズに見られてるだけなのに・・・
「しかし感心だよ、今時の女子大生なんて大抵経験済み・・・
ひどいと経験人数二桁もあるのに処女とは」
「アンタに感心されても何も嬉しくないわよ・・・」
「じゃあ味見を・・・」
「え・・・」
なに、近付いてきてるのよこいつ・・・

「やっ、やあぁっ！」

「ふぅ…処女JDのあそこを舐めれるなんて
もう無いだろうからなあ…
たっぷり味わっとかんとな」

「ひっ…やっ、いやっ…！」
舐められてる…
こんな奴の舌があそこを這って…
き、気持ち悪いっ！

「いやー、ここが臭い残念な娘も多いけど
ゆりねくんは全身いい匂いだなあ…
…ずっと顔うずめてられるよ」

「～～～っ」
こんな目に遭うくらいなら、臭い方がマシよ…

「おっと、下だけでなくこっちも弄ってやるからな」
「いらないわよ・・・やめっ・・・」
「ほれほれ、ちょっと固くなってきたか」
「んっ・・・！」
どこ摘んでるのよ、この変態・・・！
「可愛い声が漏れたねー・・・
もっとゆりねくんのそういう声聞きたいなあ」
「だ、誰がそんな・・・」

「ひあっ・・・！」
「おぉ、さすがに狭いな・・・」
「や・・・あ、あぁ・・・」
指、挿れられっ・・・・・・
不快すぎるわよこんなの・・・
「指一本でこのキツさか・・・
オナニーも全然してないんじゃないか」
「いいから、抜いてっ・・・
んんっ・・・！」
「くー・・・可愛い反応してくれるなあ・・・
辛抱たまらんよ」

「！」
え…顔、近っ…
「へへ……んちゅー」
「んむっ……んんっ……！」
キ、キモい…くさい…
何てことすんのよ、こいつ……！
「ひひ…キスも初めてだったかな？
ゆりねくんの唇は甘いねー」
『……』
本当、最悪だわ…
「ふー…前戯はこんなところでいいか、
もう我慢できんしなあ…」

「ひっ・・・な、な・・・」
「さあ、お待ちかねの時間だよ」
「誰も待ってないわよ・・・！」
な、なにあれ・・・
あんな悍ましいもの・・・
「ほら、ゆりねくんの体弄ってたらもう暴発しそうなくらいパンパンになっちゃったよ・・・
・・・それじゃ、挿れちゃうね」
「っ・・・ま、待って・・・！
い、今ならまだこのことは公にしないわ・・だから・・・」
「ひひ、今まで毎日頭の中でゆりねくんを犯してたんだ・・・
念願叶うって時に止められるわけないだろう」
「っ・・・」
「じゃあ、いただきます♪」

「うあ、あぁっ・・・！」
「お、血・・・
へへ、嬉しいなあ本当に初めてで」
「く、う・・・」
痛いっ・・・不快さで怖気が走るわ・・・
「しかしキツいなあ、今まで犯してきた生徒の中で
一番の締まりだよ」
「知らないわよ、そんなの・・・」
ていうかこいつ、今までもこんなことしてたのね・・・
どれだけクズなのよ・・・
「くっ、う・・・・・
だめだ・・・挿れたばっかりなのにもう・・・」
「え、ちょっと・・・！」

「あ、え・・・う、うそ・・・」
中に、熱いのが出されて・・・
「ふぅー・・・・・・
いや、興奮しすぎてもう射精しちゃったよ」
「あ・・・こ、これって・・・」
「もちろん精液、つまり私の子種だよ」
「な・・・や、やぁっ・・・!
は、早く抜いてっ!」
「もう遅いよ、ゆりねくんの奥でたっぷり
出しちゃったんだから」
「そんな・・・・・」
これ・・・赤ちゃん、できちゃうんじゃ・・・
「それに一回出しただけで終わりなわけないからね、
今からまだまだ楽しませてもらよ」
「っ・・・」

「くっ・・・んっ、ふぅっ・・・」
「細い体に、下から突き入れると・・・
キュウキュウに締めてきてたまらんなあ」
「んぅっ、んっ・・・」
この体勢・・・・・中に入ってるのがはっきり
分かって、さっきより気持ち悪いっ・・・
「ゆりねくんもそんな不機嫌な表情してないで、
もっと可愛い顔して欲しいなあ」
「ふざけてるの・・・
するわけ、ないでしょ・・・っ」
「つれないなあ、初めての相手に」
「何が初めての相手よ・・・っ・・・
アンタには嫌悪感しかないわよ」
よくもそんな図々しいこと・・・

「なら可愛い声だけでも聞かせてもらおうかな・・・
・・・とっ！」
「んっ・・・！
ふあっ、あっ・・・そんな、深くっ・・・」
奥まで突かれて・・・
声が、漏れっ・・・
「へっへ、いい声出してくれるねえ・・・
ほれ、ゆりねくんも少しは自分から腰振って」
「んぅ、くっ・・・あっ、うあっ・・・！」
体、動かないのにできるわけないでしょ・・・
「う・・・そんなエロい声出されたら・・・」

「うっし・・・一番奥に種付け・・・！」
「あ・・・あぁ・・・・・・」
また・・・中に・・・・・・
「ぐふふ・・・今日のために溜めてた濃いの二発も
射精したから、本当に孕んだかもねえ」
「っ・・・・・・」
冗談じゃ、ないわよ・・・
「もう、いいでしょ・・・・・・
さっさと抜いて、これもほどいて」
「いやいや、こんなので終わらないよ？
ゆりねくんが想像以上に可愛いせいで
まだまだ私のは元気なんだ」
「これ以上・・・何する気よ・・・」

「ほれ、次はお口でご奉仕してもらおうかな」
「・・・・・・・・・・・」
「まあテクは無いだろうから咥えてくれるだけでいいよ、こっちで勝手に動かすからさ」
「頭おかしいの・・・するわけないでしょそんなこと」
「ほう・・・・・じゃあ今まで撮った動画、ゆりねくんの下着姿くらいまでネットにあげてみようか・・・」
「っ・・・！」
「ゴスロリ美少女リDの下着姿公開、なんてタイトルであげたらあっという間に拡散されるだろうねえ」
「アンタ、どこまでもクズね・・・！」
「自分の立場が分かったかな・・・それじゃあ・・・」

「んぐっ・・・！」
「おほ、膣と同じでちっちゃい口だな」
「んむ、んぅ・・」
く、うぅ・・なんて、酷い匂い・・・
臭すぎるでしょこいつ・・・
「はぁー本番もいいが咥えさすのもたまらんなー、
それも可愛い生徒にってのが最高・・」
「ん、ふうぅ・・」
もう、吐きそうよ・・・
「本当にいい眺めだなあ・・・
くう、もうっ・・・」
「んんーっ・・・！」

「んっ、ふむ・・・んん・・・」
口の中、粘ついて気持ち悪い・・・
「ふー、三発目と思えないほど出たな」
「んぐ、ん・・・」
どうでもいいから、早く離しなさいよ・・・
「ほら、ちゃんと精液飲んで」
「っ・・・」
「飲まないと離さないよ・・・それに逆らえる
立場じゃないこと、分かってるでしょ」
「っ・・・・・・んむっ、んぅ・・・」
く・・・こいつ・・・・・・
ん、うぅ・・・まず・・・
「ひひ・・・精液飲ますのは、支配してるって
感じがしてたまらんなぁ」

「へへ・・・
ちっぱいでパイズリってのも乙なもんだ」

「ん・・・うぅ・・・」
アレの感触が、ぐりぐりと・・・
拷問ね・・・

「ほとんど感触は無いが・・・薄い胸を寄せて
なんとか活用してるんだ、感謝しろよ」

「・・・・・・・・・・」
殺す・・・後で絶対殺す・・・

「まあ結局、顔さえ可愛ければ何しても興奮
できるってことだな」

「最低ね・・・」

「きゃっ・・・！」
「へへ・・・貧乳で擦って射精なんて初めてだ」
「く・・・汚いわね・・・」
顔に、こんなのがかかって・・・
最悪だわ・・・

「さて、膣内も口も乳も使ったし次は・・・」
「もう、十分でしょ・・・
・・・いい加減に解放して」
「いや、まだ十分とは言えないなあ・・・
・・・後ろも使ってないし」
「う、後ろってなによ・・・」
嫌な予感しかしないわ・・・

「ちょっ・・・な、何して・・・
どこに当ててるのよ・・・！」
「やっぱりお尻の方も試さなきゃね」
「じょ、冗談でしょ・・・」
「気の強い女はお尻が弱いってのも定番だし、
レイプはこっちも使うのが基本なんだよ」
「ふ、ふざけ・・・」
本気なの、こいつ・・・
本物の変態じゃない・・・
「それじゃお尻の初めても、いただきますと」
「やめっ――」

「あっ、ああっ…！」
「おぉ…りぃちゃんらめー」
「く…ぅ、うぅ…」
本当に、お尻に…
おかしくなるわよ、りんなの…
「ほれ、どうだ…？
こっちの方が気持ちいいか？」
「うあっ、あっ…ああっ…
そんなわけっ、ないでしょ…」
「く、尻の方もいい締め付けだな…
…すぐに出ちまいそうだ」
もうなんでもいいから、早く終わって…

「おら、アナルにも中出しだ・・・！」
「んっ・・・んん・・・・・」
お尻に、熱いのが・・・気持ち悪い・・・
「くう・・・こっちも搾り取られる・・・
まったく全身名器だな、ゆりねくんは」
「・・・・・・・・・・・・」
「しかし五発も出すと、さすがに疲れてきたな・・・」
「なら、終わりでいいでしょ・・・
・・・・・・もう、許して」
「あ・・・・・今のでまた勃っちゃったよ」
「っ・・・な、なんでよ・・・
もう、いや・・・」
「ひひ・・・まだまだ楽しめそうだ」

「おぉ・・・綺麗だよ、ゆりねくん」
「く、うぅ・・・・・」
縄は解かれたけど、まだ薬の作用はあるようね・・・
ほとんど力が入らない・・・
「ゴスロリファッションを外して生まれたままの姿にすると・・・本当に美少女だなあ」
「アンタに言われても怖気が走るだけよ・・・」
「まったく、またそんな生意気なことを・・・
まだまだ種付けのお仕置きが必要だな」
「くぅ・・・」

「や、あっ・・・んぁっ・・・」
「くうぅっ・・・
まだまだ締めつけてくるな」
「くうっ・・・うっ・・・」
まったく慣れないわ、これ・・・
痛いし、ずっと気持ち悪い・・・
「こんな美少女で声も可愛くて、しかも名器で・・・
・・・処女だったのが奇跡だな」
「んっ、くっ・・・気持ち悪いこと、言わないで・・・」
「ふーむ・・・性格はもう少し従順ならいいんだが、
まあそれはこれから矯正してやろう」
「誰がアンタなんかに従順になるのよ・・・」

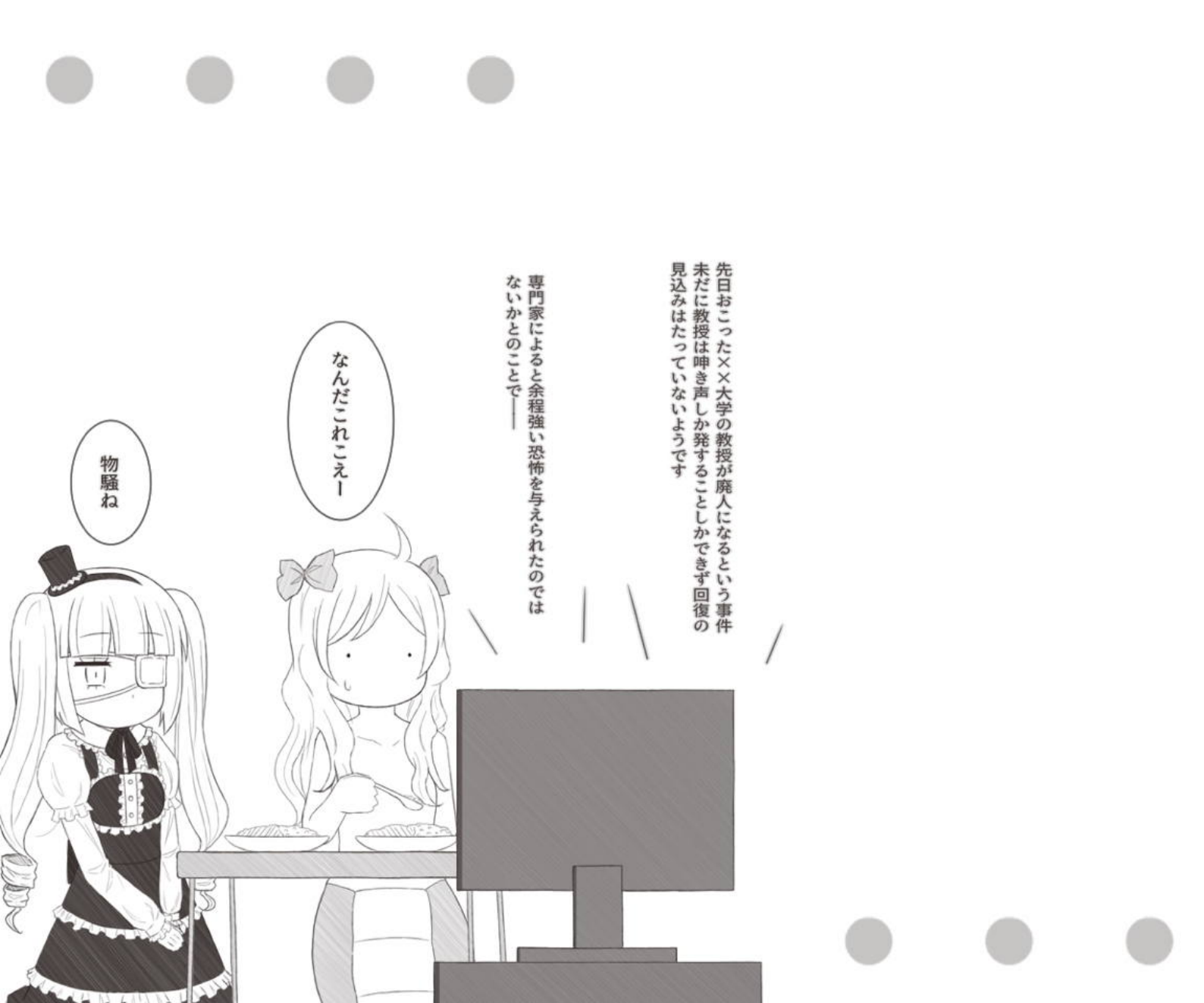
「う、ふうぅ・・・・・
今日六発目、膣内出しは三回目か」
「ん・・・くぅ・・・」
また、溢れるくらい出されて・・・
「ひひ・・・普通ならもう種切れだが、ゆりねくんと
してると無限に精子が湧いてくるなあ・・・」
「どこまで気持ち悪いのよアンタ・・・」
「・・・その生意気な言葉遣いも、子供ができれば
少しは変わるだろうしね」
「っ・・・!」
「赤玉出るまで膣内に注ぎまくって、絶対今日で
妊娠させてやるからな・・・」
「い、や・・・・・子供なんて、やあっ――」

「ふー・・・・・・さすがにもう出んな」
「・・・・・・・・・・・・・・・」
「本当に最高の体だったよゆりねくん・・・
今まで犯してきた生徒の中でも断トツだ」
「・・・・・・・・・・・・・・・」
『さて、カメラもいい感じに撮れてるな・・・
分かってると思うが、この事を誰かに話したら
この映像がネットに流れることになるからね』
『・・・・・・・・・・・・・・・』

「もう薬の効果もきれる頃だし体も動くだろ、今日のところは帰っていいぞ」
「……。。。。。。。。。。。。」
「当然、明日も明後日も犯してあげるからね・・・当分は毎日ここに来てもらうよ」
「……」
「まぁ本当に孕んだら、ゆりねくんなら結婚してあげてもいいから心配せず子作りに励もうな」
『。。。。。。。。……』
『おいおい、返事くらい――』

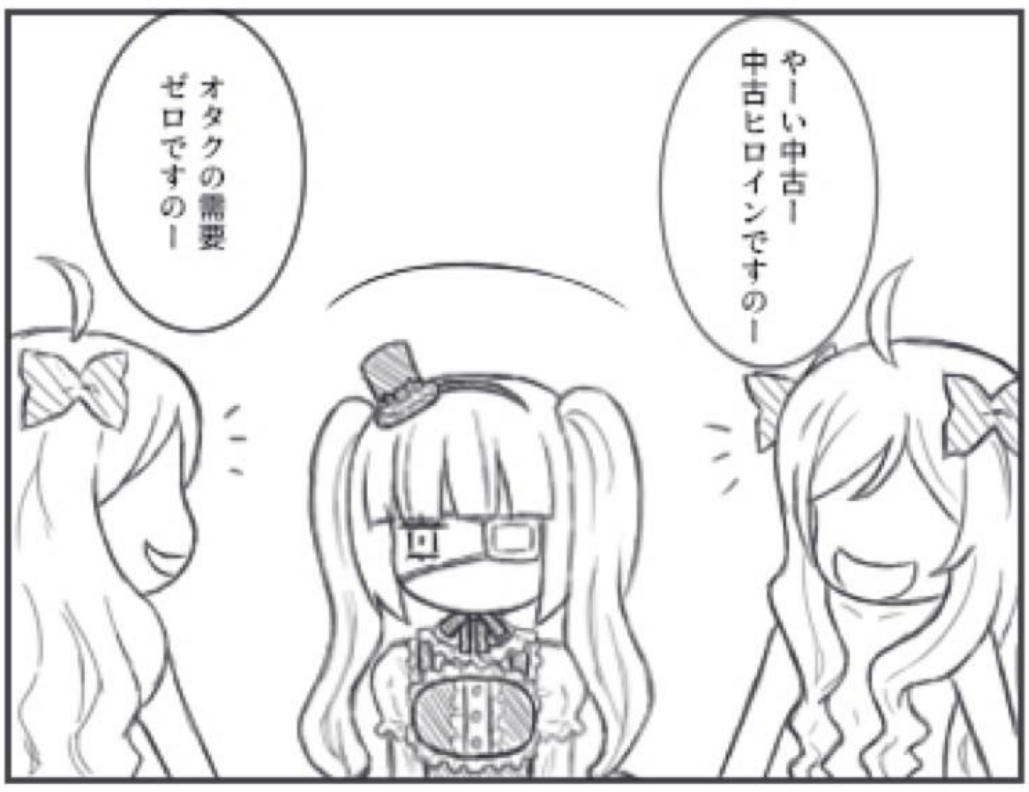
ごはんできましたのー
今日はチキンカレーですの

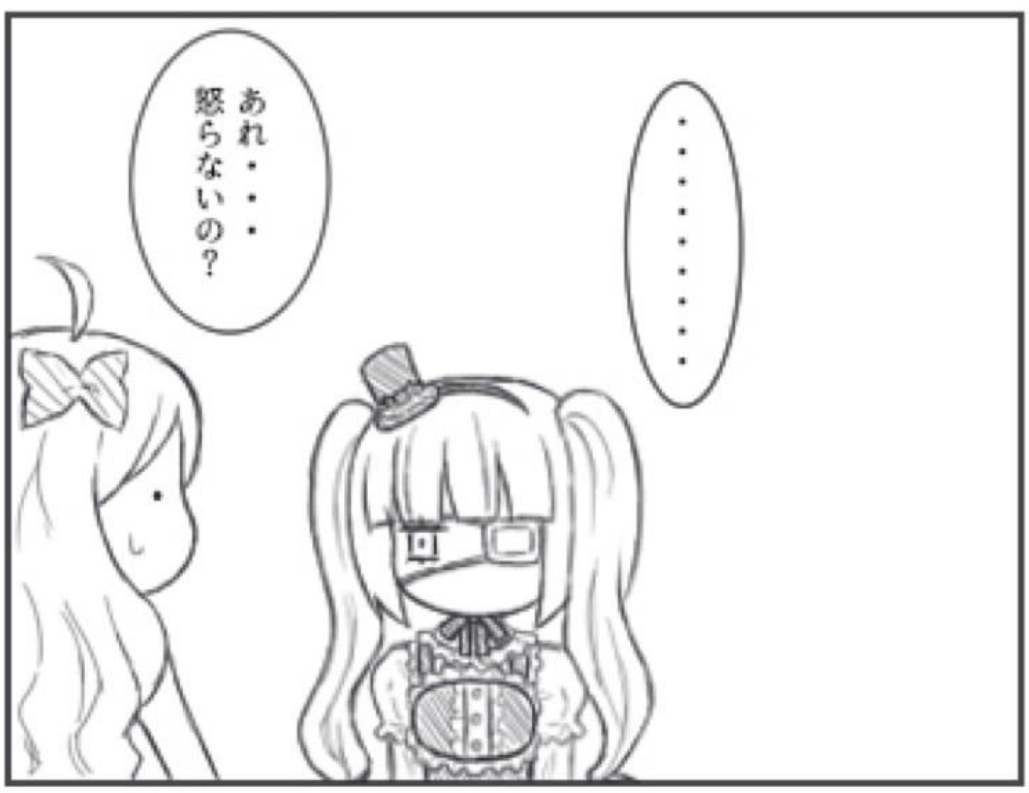
アンタほんと
カレー好きね…


先日おこった××大学の教授が廃人になるという事件
未だに教授は呻き声しか発することしかできず回復の
見込みはたっていないようです
専門家によると余程強い恐怖を与えられたのでは
ないかとのことで――
なんだこれこえー
物騒ね

ゆりねがセクハラ教授に
陵辱される話　終わり

おまけ
4コマ


やーい中古ー
中古ヒロインですのー
オタクの需要
ゼロですのー


・・・・・・・・・・
あれ・・・
怒らないの？

元から需要ゼロの
蛇女よりマシでしょ